

2021年 7月 11日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教 「 叫ぶダビデ 」 詩編 3編 高橋彰

3 | 賛歌。ダビデの詩。ダビデがその子アブサロムを逃れたとき。

2 主よ、わたしを苦しめる者はどこまで増えるのでしょうか。
多くの者がわたしに立ち向かい

3 多くの者がわたしに言います
「彼に神の救いなどあるものか」と。〔セラ

4 主よ、それでも
あなたはわたしの盾、わたしの栄え
わたしの頭を高くあげてくださる方。

5 主に向かって声をあげれば
聖なる山から答えてくださいます。〔セラ

6 身を横たえて眠り
わたしはまた、目覚めます。
主が支えていてくださいます。

7 いかに多くの民に包囲されても
決して恐れません。

8 主よ、立ち上がってください。
わたしの神よ、お救いください。
すべての敵の頸を打ち
神に逆らう者の歯を碎いてください。

9 救いは主のもとにあります。
あなたの祝福が
あなたの民の上にありますように。〔セラ

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

詩編3-41編は「ダビデ詩編」と呼ばれます。それぞれ1節に「ダビデの詩」という表題がつけられた詩が並んでいます。〔今年度のわたしたちの教会の主題聖句である23編もその中の一つです〕。この見出しが伝承と、詩編が編纂され、礼拝で読まれたり唱されたりして来たこと、そして他の文書と共に正典として重んじられ神の民に教えとして用いられてきたことと関連があります。

詩編の多くがダビデに結び付けられ、ダビデによって祈られた祈りだと受け止められ、教えられてきました。イスラエルの歴史で最も輝かしいと思われるのがダビデ王による建国の時代(紀元前1000年頃)です。羊飼いの少年であったダビデが、神に愛され、見出されてイスラエルの王になります。決して順風満帆ではなく、ダビデは常に「多くの敵のただ中を通り抜けるような、苦悩の道」を歩み続けました。仕えたサウル王から嫉妬されて命を狙われ、逃亡生活を余儀なくされ、敵対していたペリシテ人の地に身を寄せて過ごした時期もあります。彼自身の罪と失敗もあります。部下ウリヤの妻バト・シェバを自分のものにしたために工作をし、ウリヤを激戦地に送って戦死させてしまいます。預言者ナタンはダビデの罪を鋭く指摘します。ダビデは神の前に悔い改め、立ち帰り、赦しを希望します。最も身近な家族の者たちとの破れも彼を苦しめます。サウル王の娘である妻ミカルとの関係の破れと不和、こどもたちの間の愛憎、息子のアブサロム(「父の平和」という名前です!)の反逆も起ります。裏切られ、敵対者に囲まれ、国の混乱を避けるため王座を追わされて屈辱の言葉を浴びせられ逃亡します。結局アブサロムは死に、ダビデは深い悲しみを抱えます。ダビデの生涯は常に苦難、敵対する者の中を通る道でした。しかし常に神に立ち帰り、神と共に歩んだ人として、サムエル記などには描かれています。神を信じる者、神の民のるべき姿を示すようにです。詩編のうちの13の詩に具体的なダビデの状況を記した小題がつけられます。これは史実というよりは、詩編の解釈のすぐれた方法だと言えます。詩編とイスラエルの歴史書を結び合わせ、解釈された

双方の言葉をより深く味わって受け止めて行くようにと読者たちに促します。神の言葉を深く理解し、神を信じる者たちに信仰をより深めてゆくための助けとなっています。

詩編3編は、ダビデが息子アブサロムの謀反によって(サムエル記下15-19章)、王座を離れエルサレムから逃亡する場面と関連付けられます。涙を流してキドロンの谷を越え(15:23)、頭を覆って裸足でオリーブ山の坂道を登ってゆくダビデと腹心の部下たち(サム下15:30)。さらに逃亡の道中で、流血の罪の呪いの言葉をシムイから浴びせられます(16:5-14)。まさに「彼に神の救いなどあるものか」(3:3)と。この言葉はダビデへの呪いであると同時に「ある人には神の救いなどない」と言い放つことは神への批判、攻撃でもあります。ダビデは罪人だ、だから神はダビデを見放した、救われるはずがないなどという批判は、究極的には神に敵対し、神を偶像化し、神を信じないことになるのです。これこそが、人間の最も深い部分の罪であり、生きる希望を失わせる苦悩であると言えます。

ダビデは苦難から簡単に逃れることはできません。中傷も甘んじて受けます。自らの罪を自覚し、神に救いを求める資格などない、「主よ、それでも」とダビデは主を見上げて、主は「わたしの盾、わたしの栄え」と、神を呼び求め、心の叫びを絞り出します。ダビデが求めるのは神と向き合って生きることです。ダビデは「主よ、立ち上がってください」と求めます。神自らが働き、神を小さなものにしようとする人間たちに立ち向かってくださいと。そして人間の敵意に恐れおびえるのではなく、神を信頼することによる平安を求めます。この詩は目の前の苦難や敵が神の不思議な力で一掃されることを求めたり、それで神を信じようというのではないことがわかります。日々の眠りと目覚め、日常の中での、神との交わり、神を礼拝し祈りを続けてきたことが支えとなり、苦難の時にも「主が支えていてくださる」「救いは主のもとにある」という信頼を心に生じさせるのです。